忘れ去られた空き地で

する蔵

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ＣＬＡＮＮＡＤ』渚ルートにて、創立者祭の翌日以降、一度は体調を崩した渚が体調を持ち直したという設定でのエピソード。

ある日朋也と渚は、まるで異界に続くかのような異様で冷たい雰囲気の路地を発見する。しかし二人は、その路地に恐怖を抱きながらも惹かれるものを感じ、路地に入る。

辿り着いた先にあったのは、人々から忘れ去られたものが集まる空き地だった。

どう考えてもまともな場所ではなかったが、朋也はそんな寂しい場所に不思議と安らぎを感じていた。

そのような場所で朋也と渚は、だんご大家族のぬいぐるみを見つけるのだが――

『ＣＬＡＮＮＡＤ』から受け取ったものを消化して自分のものとすることを意図して書いた作品です（もちろん全てとはいきませんが）。

自分自身のために書いた作品ですが、この作品を読んだ方の心に何かを残すことができれば幸いです。

目次

プロローグ ―― 1
第一話 ―― 5
第二話 ―― 19
第三話 ―― 30
第四話 ―― 37
第五話 ―― 45

プロローグ

それを見つけたのは、人気の全くない空き地であった。

通学路を外れ、脇道に入る。両脇を古びた民家やアパートに挟まれているため、ろくに陽は射さず薄暗い。

通りは広くはないが、人が楽にすれ違えるだけの広さはある。

一本道なのだが、長く曲がりくねっているため、道の先は見えない。

延々と薄暗い道を一人で歩き続けるたびに、いつも朋也は疑問に思う。この道は昨日と同じ場所に続いているのだろうか、と。

人の気配はない。

ブロック塀から建物までにはわずかなスペースしかなく、建物に挟まれて圧迫感がある。それにも関わらず朋也には、路地がそれらの建物から遠く離れているように感じられた。それは人々の営みから遠く離れているということだ。

錯覚ではないのかもしれない。ここから見える建物は、本当に遠くにあるのかもしれない。ここは異界への入り口で、距離はその意味を失くすのかもしれない。自分はこの世界にただ一人の人間なのかもしれない。

この路地には人を拒絶するような冷たい空気が漂っている。実際に冷たいのか、それともそういう雰囲気があるだけなのか。

それでいて、ある種の人間には懐かしさと寛容を感じさせて受け入れるのだ。――朋也のような。

理性は危険だと告げていた。だが何度もこの路地を訪れるうちに、理性というものは既にうまく働かなくなっていた。この路地に慣れてきたと言ってもいい。この場所にはそのような人の思考を妨げるところがある。

このような路地が現実に存在するのだろうか。だが実際に存在していて、こうして歩いているのだ。存在を認めないわけにはいかない。

いや、幻を見ているだけなのかもしれない。何度この路地を訪れようと、朋也は自分の認識に自信を持つことができなかった。

道の先が見えないといっても、せいぜい数メートル横に折れるだけだ。しかしそんな角が小刻みに、永遠と思われるほども続く。だから先が見えなくなるのだ。

いや、永遠に続くわけがない。少なくとも朋也の常識にはない。頭の片隅でそう感じた。それでも朋也には永遠に思われた。認識の分裂。やはりここは異界への入り口なのだろう。

感覚が麻痺しているとはいえ、かなりの長さの路地なのは確かだ。ただの住宅街に、このような一本道の路地が存在するものなのだろうか？　しかも小刻みに曲がりくねっている。角を曲がるのも十回や二十回ではきかないのだ。さらには路地は常に一定の幅を保っている。

不思議と、この路地に面した入り口を持つ家は一軒も見当たらない。こんな偶然があるのだろうか。一軒くらい裏口があってもよさそうなものだが。全ての建物がこの路地と関わり合いになるのを避けているかのようだ。庭から路地にせり出している木々さえもない。

路地は奇妙なほどに清潔だった。アスファルトには塵ひとつ落ちていない。ブロック塀も古びているはずなのに作られたばかりのような印象を与える。雑草の一つも生えていないし、ノラ猫もいなければ虫の一匹も見当たらない。もちろん人間の姿も見かけない。時折現れるマンホールだけが存在を主張していた。

なぜこのような路地が存在するのか。だが歩いているうちに、そんな疑問も忘れそうになる。

不意に開けた場所に出た。

まさに不意という形容がふさわしい。角を曲がれば同じように薄暗く狭い道が続いているように思えるのだ。永遠に。だが朋也はそこへと辿り着く。そこへ辿りついて初めて、最後の角を曲がり終えたと気付くのだ。

何度もこの場所を訪れ、既に最後の角だと認識できている。それでも訪れるたびに唐突だと感じられた。路地が永遠に続くように思えてしかたないのだ。

ここはそういう場所なのだ。

路地が異界への入り口なら、道の行き着く先は異界なのだろう。
辿り着いたそこは空き地のようだった。入り口以外は全て二メートルほどのコンクリート塀で囲まれている。塀の向こうは古びた雑居ビルや町工場の敷地内のようだ。
小さな学校の校庭くらいの広さはある。こんな路地裏に校庭ほどの土地が残っているとは、にわかには信じがたい。幻を見ているかのような雰囲気さえ感じられる。
ただし土地の所有者から見放されたのか、雑草は腰の高さまで生え放題だ。とても人の手が入っているとは思えないので、腰の高さまでしか伸びない草なのだろう。
粗大ゴミや電化製品も競い合うかのように大量に積み上げて不法投棄されている。そのため校庭ほどの広さは感じない。
なぜか回収に出せばいいだけのはずの雑誌類までもが、紐でくくられて捨てられていた。長年の風雨に耐えて原型を留めているのが奇跡のようにも思える。
そもそもこの土地の所有者は、この土地を所有しているということさえも忘れているに違いない。そう思わせるほど人気がなく生活感のない場所だった。
それでもゴミに埋まっているのは空き地の半分余りだった。空き地の奥にゴミを重ねて、手前は広々としている。全てのゴミは律儀なほど奥側に寄せられている。
空き地を埋め尽くすほどの量ではないが、その中途半端な分量のせいで、かえって何も置かれていない土地よりも空疎感が際立ってしまっている。
捨てられたものの存在感が、生活の温もりの欠如を強調しているのだ。
空き地には陽の当たる場所もあるのだが、陽光の存在が日陰の薄暗さを引き立てている。そう感じてしまうほど空疎な場所だった。
このような場所にわざわざ重いゴミを捨てに来るのかと初めのうちは驚いていた。もしかしたら昔は異界でも何でもなく、いたって普通の空き地だったのかもしれない。

捨てられているゴミはどれも古いものばかりで、最近のものは見当たらない。現世から離れた場所になるにつれ、この土地は人々から忘れ去られていき、いつしかゴミを捨てに来る者もいなくなったのだろうか。

手前に積まれているゴミしか見ていないのだが、わざわざ奥に新しいゴミを捨てに行く人もいないだろう。しかもこの土地には新しいものを拒否するという「意思」のようなものさえ感じられた。

ここはゴミを不法投棄するような人々からも見放された土地なのだ。やはりここは異界なのだろう。

そんな場所で、それを見つけたのだ。

第一話

その日の下校は渚と二人きりだった。

春原はいつものごとくラグビー部に連行されていった。人語とも思えない悲鳴を発しながら引きずられていく春原を見送る。

何をしたのかは知らないが、昼休みにラグビー部の一年と知らずに下級生に因縁をふっかけ、三年の部員に報復されているらしい。どうせまた強引に奢らせようとでもしたのだろう。自業自得だ。

春原には悪いが、そのおかげで渚と二人きりになれたのだから、春原の馬鹿さ加減とラグビー部には感謝しなければならない。

創立者祭を何とか無事に終え、今は演劇部としての活動をすることもなく、実質的には帰宅部のようなものだった。

渚としても創立者祭での演劇で夢は叶ったことになるわけだし、渚も朋也も春原も演劇に関しては素人なため、これからどうしたものか決めかねていた。

そうしたこともあって部室には寄らず、そのまま下校しているのだった。そうすれば幸村が合唱部の顧問に専念でき、合唱部は毎日活動できるのだった。

創立者祭の翌日に渚は熱を出し、今年も留年してしまうことになるのかと恐れたのだが、渚は何とか持ち直すことができた。再び元気に登校できるようになって数日が経過していた。

朋也と渚は差し迫った懸案事項から解放され、気楽に言葉を交わしながら、まっすぐ古河家へと向かっていた。

だが実を言えば、渚と恋人らしい会話をしながらも、朋也は今ひとつ気持ちが晴れないものを感じていた。

「朋也くん、どうかしましたか？」

渚が小首をかしげて声をかけてくる。

朋也は突然、脇道の手前で立ち止まっていたのだった。

朋也の気分を沈ませていたのは、ホームルームでの進路の話題だった。

この学校の生徒のほとんどは進学する。進学校なのだから当然だ。

だが朋也に進学するつもりはない。春原もそうだろう。就職を選ぶことになる。渚に進学を望む気持ちがあるのかどうかは分からないが、身体が弱いから進学は難しいかもしれない。

朋也は進学する生徒たちをうらやましいとは思わなかった。だが彼らが坂の上へと歩を進めていることは確かだ。

(俺はいったいどこへ向かっているというんだ?)

と朋也は思った。

(渚のそばにいることはできる。でも渚をどこか別の場所へと連れて行ってやることは、俺にはできないんじゃないのか……?)

朋也はその考えを振り払う。今は今できることをやるしかないのだ。だが――

「なあ渚。ちょっとこの脇道に入ってみないか?」

「この路地にですか?」

脇道を見て、再び朋也に視線を戻し、少し驚いた顔で聞き返す渚。

驚くのも無理はない。あまりにも唐突だ。

道幅は二人が何とか並んで歩ける程度のものか。薄暗い路地だ。

道が曲がりくねっているせいですぐ近くまでしか見えない。その先がすぐに袋小路になっている可能性も考えられた。

この古さを感じさせる路地は、人の侵入を拒んでいるようですらある。表通りとの空気の境目が目に見えそうなほど、特殊な空気を感じさせた。うまく言葉にできないのだが、現世に存在してはいけないような、そんな雰囲気を漂わせている。

だが朋也はどうしてもこの道に入ってみたかった。ただの好奇心ではない。そこには何か切実なものがあると感じられるのだ。その理由は朋也自身にも分からない。たまたま通りがかっただけの路地が、朋也にとって特別なものだと、そう感じるのだ。

まったく理屈に基づかないその感覚は朋也の意識の片隅を鈍く刺激していた。その感情の強さは朋也自身にも判別できなかった。

「駄目か?」

「いえ、朋也くんが入りたいのでしたら私はかまいません」

素直に受け入れる渚。

「なら入ろう」と朋也は言う。「こんな狭くて薄暗くて寂れた場所に連れ込んで悪いけどさ」
渚には警戒心はないのだろうかと朋也は思う。
(俺を信用しているのか)
それとも男とこんな場所に二人きりで危ないという発想そのものがないのか。
恋人同士だから別におかしくはないのかもしれない。だが二人はまだ高校生で……いや、しかし……。
(まあ、手を出す度胸があるかと言われると、それは……)
そんな思いがよぎったのも一瞬のことだった。
路地に入った瞬間。
朋也はその独特の空気に呑まれていた。
「何だ、ここは……」
空気が冷たい。温度が低いのではない。生気がないとでもいうべき雰囲気が漂っているのだ。冷蔵庫を開けたときの冷気ではなく、冷蔵庫を開ける想像をしたときに感じたと錯覚する冷気に近い……とでも言えばいいだろうか。ただし、その冷気の強さは比較にならない。
思わず周囲を見回す。とはいえ見るべきものは何もない。
見た目には何の変哲もない路地だ。どこからこのような異様な雰囲気が生まれているのだろうか。よく見れば塵一つ落ちてなさそうな清潔な路地だ。精巧にできたCGのようで現実感がない。
どちらから求めたのか、気が付いたときには渚と手をつないでいた。自分が現実の世界に存在しているのだと確認するように。
渚もこの路地の非現実的な雰囲気を感じているのか、かすかに手が震えていた。渚を安心させようと固く握ると、渚も強く握り返してくる。
「なあ、渚。やっぱり戻らないか。俺のわがままでお前をこんなとこに連れて行くわけにいかないだろ」
「いえ、私もこの先に行ってみたいです」
渚の声には緊張が感じ取れたが、口調はしっかりとしたものだっ

た。
「あのさ、俺に対してそんな遠慮するなよ」
「いえ、本当にこの先が気になるんです」
珍しくきっぱりと主張する渚。
「この先に何があるのか確認しないといけない気がするんです」
こちらを見上げる渚の目に迷いは感じられなかった。いつも大人しくて、でも時に強さも見せる、渚らしいまっすぐな瞳で。
「わかったよ。なら行こう」
「ありがとうございます」
「いいよ。もともと俺が行きたいと言い出したんだから」
ため息をつく。普段の渚は控え目だが、一度こうと決めたら意外なくらい頑固になるのだ。
「でも本当に無理はするなよ」
「大丈夫です。朋也くんがいてくれたら、どんなことでも乗り越えられると思います。でもこの空気はやっぱり、ちょっと怖いですけど……えへへ」
冗談めかして平気だという振りをする渚。にこりと笑う顔も朋也には空元気に見えたが、それについては何も言わなかった。
「俺の手を離すな」
それだけを言った。
「はい」
うれしそうに答える渚。
それからはどちらも何もしゃべらない。ただ手をつないだまま路地を歩いていく。二人が並んで歩くのがやっとの狭い路地だ。
道はかなり入り組んでいる。角を曲がるたびに、まるで現世から遠ざかっていくかのような感覚。
並ぶ建物に、この路地に面した入り口は見当たらない。ただの一つも、だ。
路地の空気に呑み込まれそうになる。それとも既に呑み込まれているのか。
不思議と物音がしない。朋也と渚の足音だけが響き続けている。

日々のざわめきはどこに消えてしまったというのだろうか。
足音も遅れて聞こえていないだろうか？　いや錯覚だろうか……。そんなこともわからなくなる。
確かなのは、つないだ手の感触だけだった。
どれくらい歩いたのか。感覚が麻痺する。路地の現実離れした雰囲気に圧倒されているのだろう。
だけど圧倒されていることにも徐々に気付けなくなってきている。異界こそが現世なのだと、そんな風にさえ思えてくる。まるで昔からこの場所に住んでいるかのように。ただの路地に郷愁の念を覚えるほどに。
ただ、単なる脇道にしては長すぎるという気はした。しかしその違和感も錯覚かもしれない。歩いてきた時間の感覚も失われているのだから。
初めこそ路地のあちこちに注意を向けながら歩いていた。しかし今では前方にだけ意識を向けていた。言葉をかわすこともなく、ひたすら無心に歩き続ける。
いつしか角を曲がることがただの作業になっていた。始まりも終わりもないような、そんな作業。
不意に開けた場所に出た。
「何だ、ここは……？」
つい先ほども発した言葉だった。だがその意味合いは違ったものだ。
二メートルほどの高さのコンクリート塀に囲まれた空き地だった。小さな学校の校庭くらいの広さはある。
角を曲がるまでは何も見えないが、曲がれば既に空き地に辿り着いているのだった。つくづく先が見えない。
「ここ以外に、この空き地へ入れる場所はなさそうですね」
空き地を見回しながら言う渚。
「そうだな……」
うなずきながら、朋也も空き地を見回す。
塀のすぐ向こうの建物では人が活動しているはずだ。それなのに

ここには人の気配が全く感じられなかった。寂れた場所だ。
だが不思議と恐怖は感じなくなっていた。むしろ安らぎを覚えるほどだ。しかしそれと同時に、この場所に安らぎを覚えるなと本能が警告している気もした。こんな感覚は初めてだ。どう対応していいのか判断できない。
隣を見ると渚も朋也と同様に、緊張しながらも恐怖は薄れているようだ。
「渚、もう大丈夫なのか？」
「はい、もう大丈夫です。朋也くんには心配をかけちゃいました。ごめんなさいです」
「馬鹿。俺に遠慮するなって、いつも言ってるだろ」
「そうでした。ごめんなさいです……って、また謝ってしまいました」
こちらを見上げて、照れたように笑う渚。
「ずっと手を握ってもらって、ありがとうございました。とても安心できました。もう手を離してもらっても大丈夫です」
本当に離しても大丈夫なのか朋也は少し迷ったが、結局手を離すことにした。
ずっと握っていたせいでかなりの汗をかいていた。それとも緊張のせいか。汗が冷えていくのが気持ちいい。
しかし手を離しても、まだ渚とつながっているように感じられた。不思議な気分だ。この場所が生み出す安心感のせいかもしれない。
二人は空き地の中へと入っていった。
「雑草が生え放題だな……」
うんざりしながら、腰の高さほどもある雑草の合間を進んでいく。その後ろを渚がついてくる。
よくもまあ空き地一面にこれだけ生え渡ったものだ。路地裏にあるとは思えない。
「ゴミも大量に放置されてるし……」
奥にあるゴミの山を見て、うめく。
渚もよくこんな場所に入る気になったものだ。女子高生のすることとは思えない。ただし呆れると同時に、そんな性格が好ましくもあ

る。
朋也は引き寄せられるように、空き地の奥へと入っていった。ここが自分の居場所だとでもいうように。
何故だろう。それは朋也自身にもわからなかった。惹かれるというのでもない。ただそうすることが自然だと思えるのだ。渚もそう感じているのだろうか？
「こんなに散らかっていて、土地の所有者の方も困っていらっしゃるのではないでしょうか」
心配そうに言う渚。
「所有者ね……」
このような奇怪な場所に所有者など存在するのだろうか？　もしいたとして、既にこの土地のことは忘れ去っているのではないか？
ゴミの多くは粗大ゴミか電化製品だった。紐で束ねた雑誌類もある。荷車にでも載せてわざわざこんな場所まで運んできたのだろうか。どれも古いものだ。新しいものはない。人々から見放されたものばかりがある場所だった。
あ、と渚が小さく声を上げる。何か見つけたらしい。朋也を追い越し、草をかき分け、そこへ急ぐ。必死の姿だった。そしてそこで立ち尽くした。
「どうした？」と言いながら朋也は渚のもとへと歩み寄った。「何かあったのか？」
渚の隣に立って、そこに何があるのか気付いた。
だんご大家族のぬいぐるみだった。
ぬいぐるみは三つあった。三つあるのは家族のつもりなのだろうか。片手では持てないほどのサイズだ。
ぬいぐるみは粗大ゴミの間にあるスペースに収まっていた。誰かがぬいぐるみを置くためのスペースを空けて積み上げ直したのだろうか。
渚もよくだんご大家族のぬいぐるみに気付けたものだ。渚も何かに引き寄せられたのかもしれない。
粗大ゴミを屋根のようにしていたので雨にはあまり濡れていない

はずだが、それでもぬいぐるみはかなり汚れていた。とても使い物にはならないように見える。まるで殉教者のような姿だ。
（あるいはホームレスか……）
朋也は皮肉げに想像した。粗大ゴミを家の代わりとして住まうホームレス。
普通の女の子なら触りたいとすら思わないだろう姿だ。
だが渚はぬいぐるみの一つを抱きかかえるように手に取り、哀しそうに目を閉じた。
朋也は何か言おうとしたが、言うべき言葉が見つからなかった。
風が雑草をなびかせる。
「やはりだんご大家族は、もう人々から忘れ去られてしまった存在なんでしょうか……」
ぬいぐるみを見つめたまま、渚は力なく言った。
「渚……」
「だんご大家族は百人家族で、みんな仲良しなんです。ときには喧嘩もしますけど、すぐに仲直りします。だんご達のことを考えると私も心が暖かくなります。だから私はだんご大家族が好きなんです」
淡々と話していた。しかし渚が哀しみに必死で耐えているのは明らかだった。
「これではだんご達がかわいそうです」
だけど涙は流さなかった。以前の渚なら、こういうときには泣きそうなものなのに。
渚が泣かないのは、以前よりも強くなったからだろうか？　それとも渚に少しばかりの諦めの感情があったから？　だんご大家族が流行したのは一昔も前のことで、今では顧みる人は、もう、ほとんどいないのだと。
渚はぬいぐるみを一度粗大ゴミの上に置くと、ハンカチを取り出し、ぬいぐるみを拭き始めた。ハンカチはすぐに黒くなったが、ぬいぐるみの汚れはほとんど落ちていないようだ。何かが変わったようには見えない。
「きれいにしてあげられなくてごめんなさいです」と言うと、渚は制服

が汚れるのも気にせず、だんごのぬいぐるみを胸にしっかりと抱きかかえた。子供の頃の渚なら、抱えることも大変だったであろうサイズのぬいぐるみだ。
「渚。だったらそのだんご達を家に持って帰るか？」
その問いに、渚はすぐに答えなかった。何かを迷っているように見えた。
だが何を迷うことがあるというのだ？　だんご大家族を大好きな渚が、だんご達を見捨てられるはずがない。必ず助けようとするはずだ。
（俺を支えてくれたように――）
いずれにせよ渚が答えるのにそれほどの時間がかかったわけでもなかった。
渚は沈痛な声で、
「いえ、このだんご達はここにいたほうがいいと思います」
その答えは意外なものだった。
「どうしてだ？　お前、だんご大家族が好きなんだろ。お前の性格からして、こんな状態になってるだんご達を放っておけないんじゃないのか？」
「もちろん、困っているだんご達をこのまま放っておきたくはないです。私としては家に持って帰って、お風呂できれいに洗ってあげたいです」
胸からぬいぐるみを離し、切なげな表情でじっと見つめる。
「でもこのだんご達を持っていた方が、思い直してだんご達を迎えに来られるかもしれません。だから私が持って帰るわけにはいかないんです」
そんなことはありえない。そう思ったが、口にすることはできなかった。
このぬいぐるみが捨てられたのはかなり前のことだろう。このぬいぐるみだけではない。ここにあるゴミは全て古いものだ。ここはゴミの不法投棄をするような者からも忘れ去られた場所なのだ。今さらこんな薄汚れたぬいぐるみを回収しにくるはずがない。

雨が当たらない場所に捨てたのは、持ち主のせめてもの思いやりなのだろう。そんな思いやりには何の意味もないとしても。
（だけどそんなことを言っても、渚をよけいに悲しませてしまうだけだ）
だから渚には違うことを言った。
「そうだな。じゃあ、このぬいぐるみはここに置いておいたほうがいいな」
「はい。そうします」
切なげに微笑んで、もう一度ぬいぐるみを抱き締める渚。
「その代わりこれから毎日、だんご達の様子を見に、ここへ来たいと思います」
いかにも渚の言いそうなことだった。
「じゃあ俺も付き合うよ」
「いえ、そんな、これは私のわがままですから、朋也くんは無理に付き合わなくてもいいです」
「馬鹿、お前一人でこんなところに来させられるかよ。それに俺はお前の彼氏なんだからな。俺にはどんどんわがままを言えよ。お前の望むことは、他の誰よりも先に俺が叶えてやりたいからな」
朋也は無理やり笑みを浮かべた。
あと渚が言ってるのは、わがままじゃなくて優しさだからな」
「朋也くん……ありがとうございます」
ようやく温かみのある微笑みを見せてくれた。やはり渚には笑っていてほしい。俺は渚の笑顔に支えられてきたんだからな、と朋也はしみじみと思った。
渚はだんごのぬいぐるみをそっと元の場所に戻した。
もしかしたら渚はこのぬいぐるみを、この忘れ去られた土地の象徴のように感じているのかもしれない。ふと、そう思い至った。だけど朋也はそのことに触れないことにした。
「元気出せよ。きっと所有者がだんご達を迎えに来るよ」
「はい。そうなってほしいです」
空き地を後にし、長い路地を抜ける。

不思議と来た時ほどの異質感は感じなくなっていた。
それでも路地を抜けて人気のある場所まで戻ってくると、全身から緊張が抜けていくのを感じた。人目がなければ座り込みたくなるほどの疲れだった。
その日はそのまま古河家へと帰宅することにした。
かなりの時間路地裏にいたつもりだったが、まだまだ日は暮れそうになかった。まるで時間が止まっていたかのようだった。
その夜。
明かりを消した部屋の中。
朋也は布団にくるまりながら今日の出来事を思い返していた。
あの路地。あの空き地。まるで異界にいるかのような感覚。
あの場所は一体何なのだ？
いくら無秩序に町を開発していったとしても、あの路地の入り組み方は異常な気がする。それに人家がすぐ近くにあるというのに、全く人気が感じられなかった。道に人がいないという意味ではない。空間そのものが人々の生きる世界から切り離されているかのような感覚だ。別世界への入り口のような、現実感の無さ。
そして路地を抜けた先。あの空き地の、現世から遠ざかったような安らかさ。
どう考えてもまともではなかった。
だが朋也はあの場所が気になって仕方なかった。渚もあの場所が気になるという。ならばあの場所は特別な場所なのだろう。
しかしそのことが自分達にとってどういう意味を持っているのか。朋也には見当もつかなかった。
（まあいい。どうせ明日も行くんだからな）
考えてもわからないことは考えても仕方がない。
既に夜も遅い。古河家に居候するようになってからは、普通の時間に眠れるようになったのだ。できもしないことにかかずらって、睡眠不足のまま登校するのも馬鹿馬鹿しい。――実家にいた、あの日々のように。
（今日はもう寝よう）

だがすぐに眠れる自信はなかった。
翌日も二人はこの場所に来ていた。あの空き地だ。相変わらず辺りには一切の人気がない。
昨日と同じ、異界に迷い込むような違和感を抱いて路地を抜けてきた。同じように二人、手をつないで。ただ、その違和感は少し薄れているようにも感じられた。
この空き地に漂う安心感は変わっていない。
そしてだんごのぬいぐるみも変わらず打ち捨てられたままだ。
渚はぬいぐるみを抱くこともせず、ただ黙したまま、だんご達を見つめていた。
朋也は失望したのか、それとも最初から諦めていたのかわからないまま、つぶやいた。
「今日は持ち主は現れなかったみたいだな」
「……はい」とだけ、わずかな間を置いて答える渚。沈んだ表情で、だんご達をただ見つめている。
「ほら、だんご達を抱いてやったらどうだ」
渚にぬいぐるみをひとつ手渡す。
「その前にだんご達をきれいにしてあげないといけないです」
「おっと、そうだったな」
朋也は粗大ゴミの上にぬいぐるみを置く。そして渚がタオルでぬいぐるみを丁寧に拭いていく。朋也も別のだんごを拭き始めた。
学校が終わったあと一度家に戻り、何枚もタオルを用意してからこの場所へ来たのだった。二人とも汚れてもかまわない服に着替えている。
「今日はタオルをたくさん持ってきましたから、昨日よりは少しはきれいにしてあげられると思います」
だんご達に語りかける渚。
「本当は洗濯してあげられればよかったんですけど……ごめんなさいです」
とはいえ、ここまで水を持ってくるわけにもいかない。あまりきれいにもできないだろう。

そのあとは二人とも黙々とだんご達を拭き続ける。タオルが黒くなって使い物にならなくなると、未使用のタオルと交換する。三体目は渚が拭いた。

タオルを全て使い切った。その甲斐があったというべきか否か。ぬいぐるみの汚れは、ある程度までは落ちた。あくまでもマシになったというレベルだ。汚れたぬいぐるみであることに変わりはない。しかしマシになったことも事実だ。

だがぬいぐるみが放つ、捨てられたもの特有の重苦しい存在感までは消すことはできなかった。これ以上はどうすることもできない。

ぬいぐるみがまだこの空き地にあることも確認したし、タオルで拭きもした。今日ここですべきことは終わったが、渚はもう少しここにいたいと言った。

朋也に異存はなかった。渚の好きにさせてやりたいし、それに朋也自身もこの場所のことが気になっていた。

「人の好みが変わっていくのは仕方のないことです。新しいものが出てくれば、古いものは忘れ去られます。それは健全なことだと思います」

渚はだんごの一体を抱き上げると、その頭頂部を静かになでる。まるでだんごのぬいぐるみに触れることで、自分がまだこの世界に存在しているのだと確認するかのように。

「でもだんご大家族だけは忘れ去られてほしくはなかったんです」

「渚……」

「私は朋也くんに背中を押してもらうまで、坂の下で立ちつくしていました。何もかもが変わってしまって、楽しかったことも何もかも変わらずにはいられないんだと思うと、もう一歩も動けませんでした」

それは、朋也が坂の下で渚と出会ったときにも聞いたことだった。違うのは、既に坂を上り始めたということ。

でも、と渚は続ける。

「朋也くんは、変わってしまうのなら新しいことを見つければいいんだと教えてくれました。ですから私は変わってしまうことをただ悲しむだけではいたくありません。新しい何かを探したいです」

渚は抱いたままのだんごを見つめながら、精一杯に自分の思いを伝えようとしていた。
「ですが私はだんご大家族を捨てることもしたくありません。ですからだんご達がもう一度、新たに受け入れてもらえる日が来ることを信じたいです」
あのときには無かった強さで、そう決意を述べる渚。
「朋也くんが一緒にいてくれれば、私はその日を待てます。その日をここで見守りたいです」
おそらくまだ変化に対する恐れは消えていないだろう。この場所にいたいと思う気持ちには、変化を否定したい気持ちも含まれているはずだ。
しかし渚は変わろうとしているのだ。それは確かなことだ。それが俺のおかげだというのならうれしい、と朋也は思った。
「そうだな。そんな日が来るといいな」
「はい」
その日が来る可能性は極めて低いのかもしれない。だけど渚の決意に水を差したくはなかったから、何も言わなかった。
それからも毎日、放課後になると「異界」へと足を運んだ。だが一週間が経っても、ぬいぐるみを引き取りに来る者は現れなかった。

第二話

「なあ岡崎。お前最近、放課後になると渚ちゃんとどこかに行ってるみたいだけど、いったいどこに行ってるんだ？」
春原がささやく声で訊ねてきたのは、午後の退屈な授業の最中だった。
朋也は窓の外の景色から教室へと――春原へと――けだるげに視線を移した。
「あぁ……春原は何でこんなアホ面なんだろう……」
「誰の顔がアホ面だよっ……！　しかも僕の質問と何の関係もないですよねぇっ……！」
ささやき声のまま叫んでいた。
小声でも教師に気付かれる可能性はあるが、教師はどうやら説明に熱中しているらしく、こちらには気付いていないようだ。
「すまん。あまりに退屈すぎて油断してたから、つい本音が出てしまったんだ」
「アンタ、マジでひどいんですけどっ……！　もっと友達のこと気遣えよっ……！」
「ワリィ、お前のこと友達だと思ってねえや」
「授業中にそんなショッキングなことをバラすなよ！」
思わず大声を出して立ち上がる春原。
「……その授業中に何を騒いどるんだ、春原？」
教師が怒りを抑えた声で、教卓から春原に問いかけていた。
「え……いや、その……」
「そんなに目立ちたいのなら、この問題を解いて目立ってもらおうか？」
教師がチョークで黒板をたたく。
「いやあ……僕は控え目ですから、その問題は他の人に譲りますよ……ハハハ」
手を後頭部にやって乾いた笑いを浮かべる春原。冷や汗が浮かんでいる。

「まったく……。もういいから座れ。次に私語をしたら、そのときは問題を解かせるからな」
「そのときは華麗に問題を解いてみせますよ……ハハ……」
　春原は席に着くと、目を見開き、オイルの切れたブリキ人形のようにゆっくりとこちらを向いて、
「お前のせいでエライ目にあっただろっ……」
「お前が大声を出すのが悪いんだろ」
「あんなこと言われたら大声出すに決まってるだろっ……」
「え、何か言ったっけ？」
「もう忘れたのかよ！」
「よし、そんなに問題を解きたいか」と黒板を示す教師。「なら春原にはこの問題を華麗に解いてもらおうか」
「……」
　固まる春原。
　たっぷりと間を置いたあと、春原は贅沢にもまた時間をかけてゆっくりとこちらを振り向き、
「どうしてくれるんだよっ！　お前のせいで問題当てられただろっ！
　華麗に解けって、僕に解けるわけないだろ！」
「まあ、お前馬鹿だからな」
「お前もだろっ！」
「いっしょにするな。あんな問題、解けて当然だ」
「マジすかっ！　じゃあ教えてくれよっ」
「でもなあ、当てられたのはお前だからなあ」
「お前のせいだろ！」
「実際に騒いだのはお前だろ」
「責任があるのはお前だよアンタだよ貴様だよミーだよっ！」
「前にも指摘したが、最後のは自分に責任があるって認めてるからな」
　ため息をつく朋也。
「……まあその心意気に免じて、答えを教えてやろう」
「もったいぶらずに早く教えろよっ」
「どうした、春原。早く前に出てきなさい」

教師が春原を急かす。
「ほら、岡崎……！」
立ち上がりながら朋也を促す春原。
「わかってる」
朋也は黒板を見る。何らかの数式が書いてある。Ｘの値を求めさせたいらしい。
「これは引っかけ問題だな」
「引っかけ？」
「考えてもみろ。あいつの目的は授業を真面目に受けていないお前を叱ることだ」
「アンタも真面目に受けてませんけどねっ……！」
「だからあいつはこの問題を通じてお前に説教をしようとしているはずだ」
「なるほど。その可能性は高いな」感心してうなずく春原。
「それを踏まえて考えると、Ｘというのは若者の未知の可能性を表しているわけだ。つまりこの問題を解けないお前に対して、『自分の可能性に気付いていないから、真面目に授業を受ける気にならないんだろう。しかし本当はお前にも才能があるんだから、その才能を開花させるために真面目に授業を受けろ』と言いたいんだろう」
「余計なお世話もいいところだな」
春原が吐き捨てる。
「でもその意図は僕に気付かれてしまった。だから偉そうに僕に説教ぶることはできないぜっ！」
春原は高らかに宣言すると、自信満々に前へ出る。
「どうした、やけに自信ありげじゃないか」
「僕が本気を出せば、こんな問題を解くくらい、わけはないってことですよ」
「それは楽しみだな。それじゃあ早速解いてもらおうか」
「任せておいてください」
春原は本人にとっては優雅なつもりでチョークを掴むと、黒板に長々と「Ｘ＝僕の中に秘められているけど本人もまだ気付いていない

い大な才脳」と書いた。どうでもいいが漢字の勉強もしたほうがいい。
「つまり」と春原は生徒たちの方を向き、身振り手振りを織り交ぜながら、演説口調で話す。「僕には僕自身が気付いていない才能があるけど、そのことに気付いていないから自暴自棄になるんだと、この教師は僕たちに伝えようとしているんだ」
ここで春原は力強く拳を握り、力説する。
「だが！　しかし！　この教師の推測は甘すぎると言わざるを得ないね。僕はそんなことは百も承知だ。だって僕の才能は既に開花してるんだからね！　どうだい？　僕の偉大さがわかったかい？」
教室が静寂に包まれる。
しかし一瞬の後、教室は爆笑の渦に呑み込まれた。朋也も爆笑した。教師までもが爆笑している。
春原だけが理解できずに呆然としていた。
「春原、数学でそんな問題を出すわけがないだろう。確かにお前には想像力の才能がある」
教師はそう言って、また笑う。
あとには春原の「岡崎、テメェーーー！」という叫びだけが残った。
騒がしい授業が終わってから、春原が改めて訊ねてきた。
「さっきはとんでもない目にあって訊けなかったけど、結局お前と渚ちゃんは、放課後に何してるんだよ」
「とんでもない目にあったのは自業自得だろ」
「明らかにお前のせいだよ！　何だよあの答！　よく考えたら、あんな答ありえないだろ！」
「よく考えないとわからないのか……」
「だけど僕はそんなことでは誤魔化されないぞ。そうまでして隠したがる場所だ、よっぽど楽しい場所なんだろ。僕も連れてけよ」
ため息をつく。「別に隠してるわけじゃねえよ。お前が思っているような場所じゃないってだけだ」
「ふん。それで他のやつは騙せても、この僕は騙せないぜ。僕の鋭い洞察力をもってすれば、お前の企みを見抜くことなんて晩飯前さっ」

「だから何も隠してないって言ってるだろ。あと晩飯前じゃ遅すぎるからな」
「さあ、どこへ行ってるのか吐いてもらおうか」
「人の話を聞けよ」
「ふっふっふっ、そうやっていつまでも隠し通せると思うなよ。今の僕は誰にも止められないぜ！」と言ったところで六限目の教師が教室に入ってきた。生徒達は慌てて席に着く。
「ちっ。運のいいやつめ。ここは退いてやるけど、放課後になったら覚えとけよっ！」
「あっさり止まったな」
　また騒いで問題を当てられるのが嫌らしい。大人しく席に着く春原。もちろん席に着いたところで真面目に授業を受けるわけではないのだが。
　春原は授業中ずっと「きっとあそこに……」だの「いや、もしかしたら……」だのつぶやいていた。よっぽど朋也たちがどこに行っているのか気になるらしい。何も隠してないというのに。
　授業が終わると、教師が教室を出ないうちから春原はこちらに覆い被さるように詰め寄ってきた。
「さあ、約束通り放課後が来たぜ！」
「約束しなくても放課後は来るだろ」
「放課後になったら根掘り葉掘り訊き出してやるって意味だよ！　いつまでも誤魔化しきれると思うなよ！」
「約束もしてないだろ……」
　いいかげん春原の相手をするのも面倒だった。
「わかったわかった、教えるよ。だからちょっと廊下に出て上半身裸になって、その場で一回転、額を押さえて『嗚呼、僕の美しさは何て罪なんだろう……』と言ってくれ」
「よし、わかった！」と言って教室を出て行こうとする春原「――って、わかるかっ！　それ、何の関係があるんだよ！」
「そのくらいやってもらわないと、やる気が出ないんだよ」
「どんなやる気の出かただよ！　もはや病気だろ！　あと説明も長い

！」
「頼むよ。お前の男前の顔じゃなきゃ駄目なんだよ」
「そういうことなら任せとけ！　いやあ岡崎もわかってきたじゃないか」
　ご機嫌で廊下にスキップしていく春原。単純にも程がある。朋也は教室の中で待つ。
　春原は廊下に出ると、本当に制服を脱ぎ捨てて上半身裸になり、その場で一回転する。
　そして哀しそうな表情かどうか教室からは見えないが、顔を俯け、額に手を当て、
「嗚呼、僕の美しさは何て――」
「おい春原！　お前廊下の真ん中で何やっとんじゃ！」
　春原の背後にラグビー部の屈強な男たちが立っていた。
「……え？」
　春原は恐る恐る背後を振り返る。
「こんな場所で服をはだけやがって！　露出狂か！　性懲りもなくまた人様に迷惑をかけやがって！　今日という今日は徹底的に懲らしめてやるぞ！」
「……いや……これは岡崎が……って、岡崎がいない!?　さては逃げやがったな！」
　朋也は既に別の扉から出ようとしているところだった。
「何をつべこべ言ってやがる！　さあ来い！」
「ひいいいいいいいいいいいっ！」
　ラグビー部にずるずると引きずられていく春原の悲鳴を後ろに、朋也は教室を立ち去った。
　朋也は渚と連れ立って下校した。一度帰宅して着替えてから、例の場所へと向かう。
　朋也としては学校から直接向かったほうが楽でいいのだが、渚が制服のまま寄り道するのは校則違反だと言って聞かないのだ。
　路地の入り口へと辿り着く。
「ちょいと待ちな、君たち」

突然の声にめんどくさいと思いながら振り向いた。春原が追いついてきてしまっていた。
「あ、春原さんです」
「何キャラだ、お前」と春原に言う朋也。
「あれしきのことで僕から逃げ切れると思うなんて、岡崎もまだまだ甘いね」
そう言う春原の顔面は傷だらけだった。制服もかなり汚れている。制服の下にもかなりの傷を負っているのだろう。
「確かにそんな簡単にラグビー部から逃げられるとは予想外だったな」
「逃げる？　はん、何で僕がそんなことをしなくちゃいけないのさ。あんな奴ら、まとめてちょちょいのちょいと片付けてやったさ」
「その割には、顔中傷だらけなんだが」
「傷なんかついてないやいっ！　僕はラグビー部の奴らを打ち負かしたんだいっ！」
「いや、急にそんな子供っぽくキレられても……」
春原の惨めさに、呆れを通り越した。
「……わかった。お前はラグビー部に勝った。そういうことにしておいてやろう」
「ふふん、岡崎も少しはわかってきたじゃないか」
得意げな顔をする春原。むなしくならないのだろうか。
「春原さん、お顔が傷だらけですっ。大丈夫ですか？」心配そうに訊ねる渚。
「いや、だから傷なんてついてないって……」
「早く治療しないとっ」
「だからさ……」
春原の言葉を聞かずに、渚はバンソーコーを取り出す。だんご大家族のバンソーコーだ。
顔中にだんご大家族のバンソーコーを貼る春原を想像してみる。
（哀れすぎる……）
だがそんな春原を見てみるのも一興だ。朋也は口出しせずに事態

を眺めた。
「はい、どうぞ」
渚はバンソーコーをまとめて春原の手に握らせる。穏やかな物腰なのに有無を言わせぬところがある。
「あ、ああ……」
バンソーコーを握ったまま、間の抜けた声で頷く春原。
「少しお待ちください。今、鏡を用意しますので」
春原はどうしたものかと一瞬迷ったようだが、結局はバンソーコーをそのまま無造作にポケットに突っ込んだ。
「あの……今すぐに貼ったほうが……」
「だ、大丈夫大丈夫……。後でちゃんと貼るからさ……」引きつった顔で答える春原。
「いえ、今すぐ貼ったほうがいいと思います」
「いや、ほんとに何てことないからさ」
どうしてもバンソーコーを貼りたがらない――当然だが――春原に、渚もしぶしぶ引き下がる。
「よしっ！　それじゃあ気を取り直して、行こう！」
爽やかにそう言って、春原はそのまま一人で路地に入っていこうとする。
「――って、誰もついて来ない!?」
驚いて振り向く春原。
「いや唐突すぎるからな、お前」
「そんな馬鹿な……！　さりげなく目的地へ向かおうとすれば、つられて僕をそのまま目的地まで連れて行ってくれるはずだと……」
わなわなと震える春原。
「全てを計算した僕の完璧な計画が、こうも簡単に崩れ去るなんて……！」
穴だらけの計画だと言うほかない。
「何故だ!?」と春原が叫んでいた。「何故そんなにも僕を連れて行くのを嫌がる!?」
「お前がいると、あの場所に価値がなくなる気がするんだよ。邪魔だ

から、さっさと帰れ」
「うぉぉぉぉっっ！　僕の存在は一体何なんだっ!?」
頭を抱える春原。
「朋也くん、お友達にそんなことを言っては駄目ですっ」
渚が春原の肩を持っていた。
「そうだよね、渚ちゃん！　ほら、もっとこのわからずやに言ってやってよ」
「春原さんを拒む理由なんてないはずです。お友達は大切にしないと駄目です」
「理由は……」
理由ならある。あの場所は異質だ。春原のように現実に根を下ろして生きている人間にあの場所はふさわしくない。そんな人間があの場所に行けば、あの場所の異質性が壊れてしまう。根拠はないが、そんな気がしてならないのだ。
だがそれを上手く言葉にすることはできなかった。できたとしても、それは春原には伝わらないだろう。だから渚の言うことを受け入れるしかなかった。
「わかったよ。春原も連れて行ってやってもいい気がしなくもない」
「相変わらずひねくれ者っすね！」
「さあ、行きましょう」
渚が笑みを浮かべながら言った。
その言葉に促され、朋也たちは路地へと入っていく。
「まったく、岡崎も少しは渚ちゃんを見習って――」
そこで春原の言葉が途切れた。
路地はいつものように底冷えのする空気だった。空気というより、存在自体が冷たいとでもいうべきか。人を拒む異質感。
春原の様子がおかしかった。急に立ち止まって身動きひとつしない。一見すると前方を注視しているようだが、どうやら実際には何も見ていないらしい。何かを恐れているかのような表情だ。
「春原さん？」
渚が話しかけても反応しない。春原の顔には冷や汗が浮かんでい

た。
「おい、春原。どうしたんだ」
朋也が声をかけても同様に反応はない。
「おい」
春原の肩に手を乗せると、ようやく反応を見せた。春原はこちらを向かないまま、乾いた声で答えた。
「悪い、僕やっぱ帰るよ」
そう言ってきびすを返すと、春原は呆気にとられる朋也たちに視線を向けず、そのまま足早に立ち去ってしまった。
「一体何だったんでしょうか……」
小首をかしげる渚。
「さあ……」
路地の出口を見ながら、しばし呆然と立ちつくす。
しかしいつまでもそうしているわけにもいかない。朋也は気を取り直して空き地へと向かうことにした。
「渚。春原のことを気にしてもしょうがないだろ。早く行かないと日が暮れちまうぞ」
だが渚は出発する気配を見せなかった。渚が口を開く。てっきり春原を軽視する発言をたしなめるのかと思ったが、渚が口にした台詞は朋也の予想を裏切るものだった。
「ひょっとしたら、この場所が人々から忘れ去られた場所だから、春原さんはこの場所にいられなかったのかもしれないです」
渚の声色には哀しみの色が濃かったが、そのトーン自体は穏やかなものだった。それは諦めの色だった。
そうかもしれない、と朋也は思った。ここは古いものばかりの、変化を恐れる人達の居場所なのかもしれない。春原はその閉鎖性を感じたのかもしれない。ありうることだった。この場所にはそれだけの存在感がある。
春原がこの場所に拒絶感を示したのは健全な反応なのだろう。
だが口では違うことを言った。
「あいつがそんなこと気にするような奴かよ。どうせただの気まぐれ

だろ。いつものことだ」
「そうでしょうか……」
「だからもう気にするな。さあ俺たちは行こうぜ」
朋也たちは路地を進んでいく。
春原の反応に、朋也もいつも以上に緊張したのだが、結局いつもと変わりはなかった。確かに日常から離れる恐怖はあるが、それも以前と何の変わりもない。むしろ初めての時と比べて恐怖が小さくなっている。
いつの間にかこの場所にあまり違和感や恐れを感じなくなってきていた。この場所に慣れてきたのだ。
それは良くないことなのかもしれない。だが朋也は今の状態を悪いことだとは思えなくなってきていた。
その日もいつもと同じように、だんご達を迎えに来る人を待って過ごした。
来るはずのない人を。

第三話

それからも何日間かは、二人はだんご大家族のぬいぐるみの様子を確認しに行った。それとも空き地の様子を確認しに行ったと言うべきだろうか。

その間、目に見える変化は何もなかった。

だが、ある日のこと。

空き地にささやかな、だが二人にとっては決定的な変化が訪れたのだ。

その日も同じように、もはや馴染みつつある路地を通り、空き地を訪れた。まるで日課のように。

空き地の空気は変わらない。相も変わらず、凍りつくような永遠を内包している。渚はいつものようにだんご達のもとへと急いだ。

そこで「変化」を見つけたのだ。

「あれ……？」と渚が不思議そうにつぶやく。落ち着かない様子で周りをきょろきょろと見回している。

「どうした？」

「だんご達が見当たらないんです」

確かに、いつもだんご達のぬいぐるみを置いてあった場所にだんご達が見当たらない。

見分けのつきにくいゴミの山だとはいえ、毎日来ていたのだ。場所を間違えるわけはない。

だが念のため別の場所も探す。やはり見当たらない。

「どういうことだ……？」

朋也は思わず疑問の声を発していた。ぬいぐるみは粗大ゴミの隙間に置かれてあり、どこかに転がっていくようなこともなかったはずだ。風に飛ばされてしまうようなこともありえない。

誰も来ないはずのこの場所で、ぬいぐるみが消えるはずがないのだ。

（いや……）

誰も来ないと決めつけていいのだろうか？　今さらながら、そんな

疑問を抱いた。
今までこの空き地で自分たち以外の誰かの姿を見かけたことはなかった。ここは人々から見放された土地だ。それは間違いないだろう。だが本当に誰もここを訪れないのだろうか？
（俺たちに来られて他の人が来られないなんて、そんなことがあるのか？）
春原は路地裏に入ることができなかった。多くの人は春原と同じだろう。だが朋也と渚しか入れないなんてことはあるのだろうか？
むしろ他の誰かがこの場所を訪れたと考えるほうが自然ではないか？
その誰かがだんご達のぬいぐるみを持ち去ったのではないか？
あんな汚れたぬいぐるみを大切に思えるような心優しく純粋な人なんて渚以外にはいないと思っていたのだが、そうでもないのだろうか。
（にわかには信じがたい話だが）
渚を見る。渚は胸に手を当てて何事か考えている。どのような思いを抱いているのか、その表情からは窺えない。
声をかけようとして躊躇う。何と声をかければいいのか。だが先に渚のほうが口を開いた。
「きっと、だんご達は元の持ち主の方に連れて帰ってもらったんですね」
渚の声の調子からすると、渚は自分の発言にいまひとつ自信を持てていないようだ。
朋也は言わないほうがいいと思いつつ、言わずにいられなかった。
「でも今さら持ち主がやって来るとは思えないけどな。しかもこんな場所に」
「そうでしょうか……」
頼りなさげな渚。
「いや、来ないとも限らないけどな。でも長年こんな寂れた場所に放置してたわけだからな……。今さら気が変わって引き取りに来るかどうか」

「それはそうかもしれませんけど……。でも可能性があることは否定できないと思います」
とはいえ渚も自覚がないわけではないのだろう。熱心に反論する気もなさそうだった。
ただ、と渚は言う。
「誰か他の方がこの空き地に迷い込んで、だんご達をかわいそうに思って連れ帰ったという可能性はあると思います。その方はきっと心優しい方です」
「そうだな……」
それが自然な考え方だ。朋也も同じことを考えた。
しかし他の誰かがこの場所にやって来たとは、どうしても信じられなかった。この場所は現世から遠い場所で、現実をしっかりと見据えて生きているような人のやって来られる場所ではないのだ。
(じゃあ、だんご達のぬいぐるみはどこに消えたというんだ?)
わからない。
もう、そのことについては考えたくなかった。
元の所有者を待つという当初の目的は果たされなかったが、だんご達が貰われていったこと自体は喜んでいいはずだ。それなのに朋也は喜べないでいた。
(なぜだ?)
わからない。考えたくない。なぜ考えたくないのだ? わからない……。
突然の感情に戸惑う。
朋也はただ、だんご達がどこかへ隠れただけなのだと信じたかった。この場所は何も変わっていないのだと。
この場所には変わらずにいてほしいのだ。
風が二人の間を吹き抜ける。雑草をなびかせる。
朋也は何も言わずに渚の手を握った。渚も握り返してくる。人の温もりが朋也の心を落ち着かせる。
だが渚は朋也のその行為を、渚の心を落ち着かせようとする朋也の優しさだと感じただろう。朋也の気持ちには気付いていないはずだ。

あの日、あの坂の下で、朋也は渚に言った。変わっていくのなら、次の楽しいことやうれしいことを見つければいいのだと。
だが今の朋也は「変化」を受け入れられないでいた。
渚はどうだろうか。あの時のように変わることを恐れているだろうか？　それとも朋也が言ったように、次の楽しいことやうれしいことを見つけようとしているだろうか？
こんなに近くにいるのに、渚の気持ちがわからない。この場所と同じように、渚もまた変わってしまい、俺の前から消えてしまうんじゃないか……ふと朋也はそんなことを思った。思ってしまった。
（そんなはずはない……）
朋也は渚の手の温もりに意識を集中した。渚はここにいる。ここにいるのだ。
（俺の隣に……）
どれくらいの間そうしていただろうか。渚がぽつんと言った。
「朋也くん……もう大丈夫です。ありがとうございました」
その言葉を合図に、朋也は躊躇いながら手を離した。積み木が崩れることを恐れながら手を離すように、そっと。
渚は微笑んで言う。
「だんご達は貫われていきましたから、私たちがこの場所に来る理由もなくなってしまいました」
渚の笑みにはどこか寂しさも混じっていたが、それでもだんご達が必要とされたことを心から喜んでいるようだ。渚はだんご達が誰かに貫われていったと信じているのだろうか。
渚の声は穏やかで……それなのになぜ、胸をこんなにもざわつかせるのだろう。
これまで一度も感じなかったことだが、渚が与えてくれる安らぎは、この忘れ去られた場所で味わう安らぎにそぐわない。今ではそう感じていた。
（なぜだ……）
朋也にとって渚は何よりも誰よりも大切な存在で、他に比べるもののない心の支えだ。それは今も変わらない。

しかしこの場所に渚といると、どうしても心が乱れるのだ。
以前はそんなことは感じなかったのに、なぜ今になって感じるようになったのか。
「朋也くん、帰りましょうか」
その満足そうな声はどこか遠くから聞こえてくるようで、朋也はうなずくことしかできなかった。
人々が日常を生きる世界へと戻れば、この胸のざわめきも鎮まるだろうと信じて。
帰宅した後も、朋也は落ち着かない気持ちのまま夕食の席についていた。
安らぎとは何なのか。渚の与えてくれる安らぎとあの場所で感じる安らぎとは、はたして本当に違うものなのだろうか。それを確認したかった。
「おい、小僧。お前晩飯楽しんでるか？」
「あ？　ああ……」
唐突な秋生の言葉に戸惑う。
気持ちを見透かされてでもいるのかと思うが、そんなわけはない。
「早苗さんの料理はいつも美味いし、楽しいよ」
「そうかそうか」と満足そうにうなずく秋生。「ハッスルしてるか」
「ハッスルはしてない」
「しろよ！　バラードを歌うときみたいにハッスルしろよ！」
「バラードにハッスルのイメージはないだろ……」
「かぁーっ！　情けねぇこと言いやがって！」
秋生はおおげさに嘆きながらグラスのビールを飲み干す。
グラスをテーブルに叩きつけるように置きながら、
「みみっちい名前だから、そんな小せぇことしか言えねぇんだよ。今からでもユニバース宇宙に改名しやがれ」
「変えないし、ダサいし、意味かぶってるからな」
「なんだとぉぉぉぉぉっ!?」目を血走らせながら叫ぶ秋生。「俺の親心を踏みにじりやがって！」
（あんたに育てられた覚えはない）

今にも立ち上がって地団太を踏み出しそうな様子の秋生に呆れる。
渚が助け船を出してくれた。「お父さん、朋也くんは情けなくないです。私が困っているときには、いつも助けてくれます」
いや、この流れは本当に助けとなるのか？
渚は照れて顔をうつむけながら、ぽつりと言った。
「朋也くんはとても心強くて……かっこいいです」
親の前でそんなことを言ってしまうのか。以前にも同じようなやり取りをしたことがあったが、やはり恥ずかしすぎる。渚は相変わらずアホの子だ。何も変わってない。そのことに安堵する。温かな気持ちになる。
だが変わってないということは、あの異界の安らかさとの違いがわからないままだということでもある。
早苗の「あらあら、お熱いですね」という冷やかしや、それを真に受けて朋也に怒りを向ける秋生に適当に返事をしながら、朋也は焦燥感のようなものを覚えていた。異界の安らぎの理由を解き明かさないと、いつか大切なものを失ってしまうような。
いつものように夕食を楽しみながらも、どこか心ここにあらずの朋也であった。
夕食の後、ずっと居間にいても、渚との時間に以前との違いは感じられなかった。
渚が寝てしまう前に渚の部屋を訪れる。
「どうしましたか、朋也くん」
渚が微笑んで振り向く。既にパジャマ姿だ。布団を敷いているところだったようだ。
「いや……」と朋也は言葉を濁す。
渚の何気ない仕種からも変わらない温かさがあふれていて、朋也は自分が何を求めて渚の部屋に来たのかわからなくなった。
渚といるときに感じる安らぎに変わりはない。俺は今までどおりでいればいいんだ、と朋也は思った。
「寝る前に渚の声が聞きたくなってさ」
「変な朋也くんです」と渚は笑う。「朋也くんらしくないこと言ってま

す」
「いや、渚のほうがよっぽど変だと思うけどな」
「そうでしょうか」
「いや、変でもいいんだけどな。それが個性だ。演劇のことを何も知らないのに演劇部を作りたいとか、今でもだんご大家族を好きだとか」
「だんご大家族を好きなのはおかしくないです。今日もだんご達を引き取っていかれた方がいらっしゃいました」
穏やかな表情で、しかし自分が間違っているとは夢にも思ってないような口調で話す渚。
渚の中では既に、誰かがだんご達のぬいぐるみを引き取っていったと確定しているのだろうか。何がそう信じさせているのだろうか。
「そうだな。渚はそのままでいてくれ」
朋也の気持ちは伝わらなかっただろう。渚はきょとんとしてうなずく。
「やっぱり変な朋也くんです」

第四話

その日から渚とともに空き地を訪れることはなくなった。
渚はもうあの場所に未練はないようだ。興味を失ったように見える。朋也はまだ気になってはいたが、空き地に近寄ることを恐れていた。
朋也はあの路地裏のことをできるだけ考えないようにしていた。渚と二人で、ときには春原も交えて、穏やかに過ごした。
だが朋也の中にはどうしても消せないしこりが残り続けていた。それは日を追うごとにその存在感を増し続けていく。忘れてはいけない何かを忘れてしまった罪悪感のように。
朋也はもう一度あの空き地へ行ってみるべきか迷っていた。異界といっていいあの場所に、どうしても惹かれてしまう。
だがそこに渚を近付けたくなかった。以前は渚を連れて行くことに何の抵抗もなかった。しかしだんご達のぬいぐるみが消え去って以来、渚があの忘れられた場所にいることが好ましくないと思えてならないのだ。
朋也としては渚と一緒に、あの場所で安らかな気分に浸りたいという気持ちは強い。それでも、渚はあの場所にいてはならないと感じるのだ。渚には現実だけを見ていてほしかった。
そしてそれ以上に、渚は変わってしまったのだと――もう二度とあの安らかな一体感を渚と一緒に味わうことはできないのだと――思い知らされてしまうことが怖かった。
朋也がもう一度あの場所に行きたいと言えば、渚も一緒に行くと言うだろう。渚に来ないように言うこともできるが、渚は心配するはずだ。渚もあの場所が異界だとわかっているはずだから。
そのときは渚には秘密にする必要がある。だけど渚に嘘をついたり誤魔化したりしてまで、あの路地裏を訪れたいわけではなかった。
そのようにして気分が晴れないまま、数日を過ごしていた。
「朋也くん、最近元気がないみたいです」
気がかりのあることを渚に気付かれた。

（当然か）
どうしてもあの空き地のことを忘れられない。ふとした瞬間にあの空気を思い出してしまう。下校時、あの路地へ行かない道を選ぼうとすると、その思いは特に強くなる。
今もそうだ。あの路地の入り口へと向かう曲がり角にいると、何かがあの路地の奥から手招きしているように感じられるのだ。ここからは数百メートルは離れているのに。
通らないはずの道を朋也がじっと見つめているのだ。渚も不思議に思っているはずだし、この先にあの異界への入り口があることもわかっているだろう。
できるだけ普段どおりに振る舞おうとはしているのだが、やはり一緒にいる時間の長い渚に隠し通せるものではなかった。しかも渚は、いつも自分のことより他人のことを気遣う優しい娘だ。ましてや今は恋人なのだ。
しかし朋也が気に病んでいる内容までは、さすがに思い至らないはずだ。
渚に気がかりの理由を話すべきか？　だが朋也自身もあの路地裏が気になっている理由がわからないのだ。話しようがない。
あのような寂れた場所にいったい何の魅力があるというのか。なぜあんなにも安らぎを覚えたのか。
迷ったが、朋也は渚に話さないことに決めた。
「いや、大したことじゃない。ちょっと気になることがあっただけだ」
「本当ですか？　私を心配させないように何か隠していませんか？」
「本当だよ。何も隠してない」
渚を安心させようと微笑む。渚から目を逸らしたかったが、逸らすわけにはいかない。渚の瞳を見つめて話す。
「だから渚は心配しなくていい」
中身のない微笑だ。ちゃんと微笑んでいるように見えただろうか？
渚はまだ納得していない様子だったが、それ以上は何も訊いてこなかった。渚に隠し事をすることに罪悪感を覚えたが、話すことはでき

なかった。
（俺は何をしてるんだろうな……）
あの路地は気まぐれに寄り道したときに見つけたもので、何の理由もなく何度も立ち寄る場所ではない。渚に黙っている以上、あの路地へと曲がる道に向かうことはできない。
朋也は空き地への思いを抑え込み、そのまま帰宅する道を選んだ。
「岡崎、お前最近どうしたんだ？」
春原がそう訊いてきたのは、それから数日後のことだった。
鞄を持って帰ろうとする矢先だった。動揺が顔に表れないよう、つとめて平静に振り返る。下校の邪魔をされて面倒だ、という具合に。
（まさか渚だけじゃなく春原にも気付かれるとはな……）
もともと学校生活に興味がないとはいえ、春原に気付かれるほど学校生活に身が入っていないとは思わなかった。
（いよいよ問題を先送りにできなくなってきたぞ……）
このままでは何をしていても落ち着かない。楽しいことをしていても気がかりが妨げとなり、心から楽しむ余裕がなくなってしまう。いや、既にそうなっているのだ。
さすがに朋也も現状に危機感を覚えてきた。
「どうしたって、何がだよ」
訊き返す朋也に、春原は嫌味な笑みを浮かべ、知ったふうな口ぶりで答える。
「もしかして渚ちゃんと上手くいってないんじゃないの？」
「んなこたねえよ」
「ほんとかよ？　ほんとに何もないの？」
「しつこいぞ。そんなことだから油汚れみたいな男だって言われるんだよ」
「言われたことねぇよ！」
「あ、わりぃ……お前は知らなかったんだな……。今のは忘れてくれ」
「え……？　ほんとに言われてるの……？」
「……」
「何か答えてくれぇぇぇぇぇっ！」

床を転がって悶える春原。しつこいといっても、これは油汚れというより、黒くて一匹見かけたら三十匹はいる生物のほうだった（金髪だが）。
しばらくして落ち着いたのか、春原は気を取り直して訊き直してきた。
「じゃあ、他に気がかりでもあるのか？」
やはり朋也が普段と違う様子なのが気になるらしい。
春原にまで心配されているのだろうか？　だとすれば重症だった。
「別に。何でもねえよ」
春原にはそう言ったが、朋也はもう一度あの空き地を訪れる決意を固めていた。
渚と同じように春原も納得していないようだったが、適当に会話を打ち切った。
不思議なことに、あの路地に入らなかった日から春原は朋也たちと放課後に行動をともにすることはなくなった。
これは偶然なのだろうか。それともあの異界の空気が影響しているのだろうか。
（考えすぎか……？）
ともかく、今日も春原と別れたあと、朋也は渚と二人で帰宅することになった。
渚にはヤボ用があるとだけ言って、一人で例の路地へとやって来た。
渚の心配そうな顔に気付かなかったわけではないが、あえて気付かないふりをして、一人でこの場所を訪れたのだ。
最後にこの路地を訪れてから既に一週間が過ぎていたが、予想通り何の変化も見当たらなかった。
空き地はゴミの溜まり場だが、そこへと至る路地にはただの一つもゴミは落ちていない。それどころか清潔感さえ漂っている。路地に似合わぬ清潔感には気味の悪さしか感じなかった。まるで時の流れから放り出されたかのようだ。
今まで路地にゴミが落ちていないことを当然だと感じていたこと

に気付く。なぜだろう。不思議なものだ、と朋也は思った。
久しぶりに訪れても、この異界へと続くような冷たい違和感は変わらない。自分が正しい場所にいるのか不安になる。かなり慣れたとはいえ、相変わらず精神をざわつかせる空気だ。
長い長い路地を通り抜けていく。どれだけ角を曲がれば目的地に辿り着くのか、幾度通り抜けても覚えられない。実は通るたびに路地が変わっているのだとしても驚かないだろう。記憶されることを拒絶しているかのようだった。
不意に空き地が現れた。いつもと同じように。どの角もコピーしたように同じに見えて、どれが最後の角なのかわからない。
空き地に入る。忘れ去られたこの土地に安らぎを感じるのも変わらない。
この安らぎの理由を知りたいのか、それともただ安らぎが欲しいだけなのか。朋也は自問した。この一週間、何度も自分に問いかけてきた。
ここに来れば、その答えがわかるかもしれない――そんな淡い期待もあった。
やはり答えはわからない。ただ安らぎを得ただけだ。
だが渚のそばにいるときほどの安らぎは得られない。
（それなのに、なぜ俺は一人でこんな場所にいるのだろう）
腰まである雑草をかき分け、奥へと進む。
粗大ゴミなどが積み重なった奥側と、雑草しかない手前側。奇妙な対比だった。整然としていて、律儀ささえ感じる。
粗大ゴミの山を前にすると、いつもながら圧倒される。いったいどれだけの人が、この空き地までゴミを運んできたのだろう。
冷蔵庫、ブラウン管テレビ、ビデオデッキ、ラジカセ。本棚にタンス。学習机。よくぞここまで運ぶことができたものだ。金がかかっても業者に回収してもらったほうが楽だろうに。
どれも古いものばかりだ。何年前のものだろう。古さを競い合っているかのようだ。新しくてもせいぜい九〇年代前半だ。それも数は少ない。多くはバブル時代の家電製品だと思えた。

一昔前に過ぎないだんご大家族のぬいぐるみは、この中では新しい部類だと言えた。そのだんご達が真っ先にこの空き地から消えたのは、皮肉なことだと言えるのかもしれない。

いずれにせよ、二〇〇三年の今からすれば昔のものに過ぎなかった。

そんな古い家電製品に朋也は懐かしさを覚えた。かつては朋也の家にも同じような家電製品があった。この場所では不思議とそんなことを思い出す。

あの頃は子供ならではの好奇心で世界を眺めていたものだ。

冷蔵庫を開けるためにぐっと力を入れることも。テレビのチャンネルを変えるためにリモコンのボタンを押す感触も。初めて学習机に向かって座ったときの座り心地も。ありありと思い出すことができた。

ここに捨てられている家電は朋也の家にあった家電とは違うものだ。だが時の流れに晒された家電たちは朋也から失われたものたちのことを思い出させた。

風に雑草がなびく。思えば、いつも不思議と強い風が吹いていた。どこから吹いているのだろうか。建物の間でおかしな反射をしているのかもしれない。小さな校庭ほどの土地一面の草が揺れる様は、なかなかの壮観だ。

空は晴れ渡っているようだが、太陽の姿は建物に隠れて見えない。空き地の大部分には陽が射さず、その様はまるで日陰に守られているかのようだった。

そういえば何度もこの空き地を訪れたが、一度も雨に降られたことはなかったな、と朋也は思った。

(俺はこんな所で何をしているんだろう)

だんご達のぬいぐるみも既に失われたのだ。この場所にいても、ただ立っていることしかできない。

もしかしたらどこかにだんご達のぬいぐるみは隠れているのかもしれない。だが探す気にはなれなかった。とてもだんご達が残っているとは信じられなかった。

ゴミの一つ一つを眺めるでもなく、物色するでもなく、ただ全体として眺める。
もちろんそれで答えが得られるわけではない。
目を閉じ、風を感じる。
この気持ちは何だろう。安らぐような、もの寂しいような。
ただこの場所が無くなってほしくなかった。変わらないでいてほしかった。それだけが確かな気持ちだった。
それからも何日か続けて路地裏を訪れた。空き地は変わらず安らぎを与えてくれたが、やはり答えに辿り着くことはできなかった。
長いような短いような時間を過ごした後、空き地を去る。そしてまだ日が沈んでいないことを知る。本当に時間は止まっていたのかもしれない。
同じことを繰り返すだけの日々だ。
その日の朝も同じ気持ちだった。それまでと何一つ変わることなく。下校後、一人で空き地へ行こうと思っていた。そして不思議な安らぎを得て。日が沈まないうちに帰宅するのだ。
そう思った矢先の出来事だった。
渚が高熱を出した。
渚を留年させることになった病気が、再び発症したのだ。原因は不明。治療法も判明していない。
今回も長期間の休学が予想され、再度留年する恐れもあった。
（なぜ気付かなかったんだ……！）
どうも前日から体調は悪くなっていたらしい。
朋也は、そんな状態の渚を置いて空き地などにうつつを抜かしていた自分を責めた。
（これじゃ彼氏失格じゃないか……！）
創立者祭の翌日を思い出す。朋也と渚は部室に忍び込み、黒板に落書きをした。二人で日直をすると。二人一緒がいいのだと。
それなのに朋也は一人で寂れた路地裏などに行っていた。短時間とはいえ、渚と一緒にいられる時間を削ってまで、あのような人の営みから遠く離れた場所に行くべきではなかった。しかも渚の体調に

も気付かずに。
一度持ち直したことで油断があったのかもしれない。だとしても許されることではなかった。
朋也が渚の体調に気付いたところで、何ができたわけでもない。それでも朋也は自分自身が許せなかった。
今となっては、渚と一緒にいるには、渚の部屋で時を過ごすしかなかった。
学校にいる間も授業や進路のことなど何一つ頭に入らず、ただ渚のことだけを考えた。そして帰宅すれば、布団から起き上がれない渚のそばにいて、渚を元気づけようと話しかけたりした。そんなことしかできなかった。
現世から離れた路地裏のことなど、考える余裕はなかった。

第五話

そうやって季節は過ぎていった。
春から梅雨へと移り変わり、やがて夏が訪れたが、渚は回復の兆しを見せなかった。
制服も夏服に変わったが、渚の夏服姿を見ることもかなわぬまま夏休みに入った。
もし渚が元気でいてくれれば、どんな夏休みを過ごすことができただろう、と朋也は思った。朋也にはありもしない青春の一コマを夢想することしかできなかった。
朋也は毎日ずっと渚の部屋で、渚のそばにいた。
この部屋だけが時の流れから置いていかれたようだった。
ある日、朋也はふと、あの路地裏を思い出した。
渚が寝込んで以来、思い出すこともなかった。あれはどれだけ前のことだっただろうか。もうずいぶんと昔のことのようだ。ほんの数ヶ月前のはずだが、何年も前のことに思えた。
渚が高熱を出したあの日から、全てが変わってしまった。安らぎを求めるような心の余裕さえも失ってしまった。ただ渚の身を案じるだけの日々だった。
しかし一度あの異界の空気を思い出してしまうと、もう意識から追い出すことはできなかった。
考えてみれば、この部屋もあの空き地も、時の流れから取り残されてしまったという意味では似ているのかもしれない。ならば、もう一度あの異界へ行ってみるのも悪くないのかもしれない。そんな気がした。
（正気か、俺は……？）
あの日の後悔を忘れた日はない。朋也は渚を置いて一人であの空き地に入り浸り、渚の体調に気付けなかったのだ。
だが朋也は、既にあの路地裏を訪れる決意を固めていた。
渚はよく眠っているようだ。日はまだまだ落ちそうにない。夏の空だ。高く遠い青空。手を伸ばしても届かない、空。

「早苗さん」と店に出て呼びかける。
「はい。朋也さん、どうされましたか？」
「ちょっと出かけてきますんで、渚のこと、よろしくお願いします。今はよく寝てますんで」
「はい。もうすぐ秋生さんも帰ってきますので、大丈夫ですよ」
「それじゃ、行ってきます」
いたたまれなくて、すぐに店を出る。
早苗に(それと秋生にも)罪悪感を覚えないわけではなかったが、やはりもう一度あの空き地を確かめないわけにはいかなかった。
無意識のうちに早足となって路地裏へと向かう。
気が急く。
一刻も早く空き地へと辿り着き、あの空気を味わい、異界ということの意味を確認するのだ。そして可及的速やかに引き返さねばならない。
路地へと至る表通りまでやって来た。既に馴染みがあるといってもいい場所だ。迷うことなく、路地の入り口まで歩いて行く。関係のない横道を無視して通り過ぎる。
だが歩くうちに何かがおかしいと気付いた。
違和感の正体はすぐに判明した。いつの間にか建物の並びが見覚えのないものになっているのだ。
(通り過ぎたのか!?)
愕然とする。
あれだけ何度も訪れた場所だ。道を間違えたとは思えない。それに路地に入る前から強烈な圧迫感のある場所なのだ。気付かずに通り過ぎたとは思えない。
だが現に入り口に辿り着けていない。
朋也は動揺する気持ちを抑えて、注意深く建物の並びを見ながら、来た道を引き返す。少し歩くと見覚えのある場所へと戻ってきた。
入り口を通り過ぎていた。
(道を間違えたはずはないぞ!?)
今度は駆け足で道を戻る。すれ違う人が驚くが、気にしている余

裕はない。
やはり、見当たらない。
どこにもない。
入り口があったはずの場所を通り過ぎている。
（いったい、どうなってやがる……？）
汗が止まらないのは、暑さのせいなのか、それとも――
もはや焦りを抑えることもできず、入り口があったはずの場所を必死に探しながら歩く。だが、気が付いたときには入り口のあった場所を通り過ぎている。
もはや間違いなかった。信じがたいことだが、信じないわけにはいかなかった。
自分でも何故だかわからないのだが、朋也は確信を持っていた。
（あの路地は消えている）
そんなことが起こりうるのだろうか？　だが実際に起こったとしか思えなかった。
朋也はどうすることもできず、夏の暑さの中、ただ立ち尽くすことしかできなかった。
我に返ったときには、朋也は既に帰宅の途に着いていた。いつあの表通りを立ち去ったのか、まったく記憶になかった。
悄然として店の扉をくぐる。
「おう、どうした小僧。しけた面しやがって」
秋生がいつも通りの軽口をたたいてくるが、まともに相手をする気にもなれず、適当に返事をして、そのまま家に上がる。
「おい、小僧。本当にどうしたんだよ」
「悪い、オッサン。すぐに渚のところに行きたいんだ」
秋生は朋也の顔を静かに見つめたかと思うと、何を感じたのか、ため息混じりに目を逸らした。
「ちっ、仕方ねえな。さっさと行ってこい」
秋生の言葉もそこそこに、渚の部屋へと向かう。そこが朋也の今の居場所だった。
廊下で早苗とすれ違う。

「早苗さん、渚の様子はどうですか？」
「大丈夫です。今も部屋を覗きましたけど、落ち着いてましたよ」
「わかりました。その……」と、朋也は言い淀む。「急に出かけてしまって……すみませんでした」
「いいんですよ。それより、朋也さんも顔色があまりよくないですよ」
秋生にも早苗にも気遣われる。そんなにも動揺が顔に出ているのだろうか。
「俺なら大丈夫ですよ。ほら、こんなにピンピンしてます」
両腕を広げて肘から先を上に曲げ、力を入れてみせる。
「それならいいですけど……」
納得していない様子ながら、渋々引き下がる早苗。
何度も同じことを繰り返してるな、と朋也は思った。
（だが、こんなことは今日で終わりにするんだ）
今の渚に心配をかけるわけにはいかない。
（俺が渚を支えるんだ）
部屋のふすまの前で、小声で渚に尋ねる。
「渚、入ってもいいか？」
「はい、どうぞ」
起きていたらしい。早苗の言ったとおり、比較的しっかりとした声が聞こえる。とはいえ、やはり本調子とはいかないようだ。もう数ヶ月も渚の健康な声を聞いていない。
部屋に入ると、渚が布団に入ったままこちらに視線を向ける。寝込んだ当初は朋也が来ると布団から起き上がろうとして、それを朋也が止めたものだが、今ではそういうこともなくなった。渚が床についていることが日常になってしまっていた。
これからどうなってしまうのか。不安が募る。考えたくはなかったが、どうしても考えてしまう。
だが渚には不安を見せないように意識する。何も心配のいらない、いつも通りの自分を演じるのだ。
窓の外に目をやる。既に外は薄暗くなっていた。しかし完全に日が暮れたわけでもなかった。窓の外の景色が青味を帯びて見える。

「調子はどうだ？」と何でもないような口調で訊く。
「今日はだいぶ体調がいいです」
渚はそう言うが、起き上がることは難しいらしかった。横になったままで話す。
「朋也くん、さきほどはお出かけになっていたみたいですけど……」
「ん？　ああ……大したことじゃないよ。ちょっと出かけただけだ。それがどうかしたのか？」
朋也がそう訊くと、渚は少し躊躇っていたが、口を開いた。
「朋也くんは……ずっと寝てばかりの私のそばにいなくてもいいんですよ」
「馬鹿っ」
思わず叱りつけるように言ってしまう。
気まずい思いを誤魔化すように、優しく言葉を続ける。
「俺はお前の何だ？　彼氏だろ？」
「はい……」
「だったらさ……そばにいなくてもいいなんて悲しいことを言うなよ。俺はお前とずっと一緒にいたいだけなんだし、渚もそれを受け入れてくれればいいだけなんだよ。付き合ってるんだからさ……」
「はい……」
渚はかなり弱気になっているようだ。無理もない。原因もわからないような病気が長く続き、しかもそれを幼い頃から繰り返してきたのだ。去年は留年までした。
そうした経緯があって、渚はあの日、坂の下に立ち尽くしていたのだ。今もあのときのように弱気になっていた。
渚の手を握る。弱々しかったが、しっかりと握り返してくれた。そんなことに安堵を覚える。
町が、人が、どれだけ変わろうと、渚だけは変わってほしくない。そう願った。強く、願った。
どれだけの間そうしていただろうか。渚はいつの間にか寝入っていた。
「朋也さん、晩ご飯の時間ですよ」

渚の食事を運んできた早苗が声をかける。
もうそんな時間だった。
渚の食事を持ったまま引き返す早苗に返事をして、朋也も居間に行こうとする。そっと渚の手を放し、立ち上がる。
そこで机の上のだんご大家族のキーホルダーが目に入った。渚が小学生の頃、学校に付けて行っていたというキーホルダーだ。長らく物置の中で忘れ去られていたのだが、演劇の資料となる絵本を探す際に発見したものだ。
あの空き地にあったぬいぐるみとは違い、綺麗に手入れされている。
すぐに居間へ行くべきだったが、朋也はそのキーホルダーを手に取らずにいられなかった。
優しく表面を撫でる。あの空き地で渚がそうしたように。
シンプルで愛らしいデザインだ。縦に太い線が書かれているだけのつぶらな瞳が、こちらを見つめている。だんごは朋也に何かを訴えかけようとしているのだろうか。
朋也にはわからなかった。しばらくだんごを眺め続ける。一昔前に流行し、今では世間から忘れ去られてしまったマスコットキャラクター。キーホルダーやぬいぐるみに意識があるとしたら、どんなことを思うのだろう。
渚だったらわかるのだろうか。渚の寝顔を眺める。そこからはどんな答えを読み取ることもできなかった。
朋也はため息をついてだんごのキーホルダーを元の場所に置いた。
(早苗さんと……それにオッサンも、待たせてしまったな)
実家にいた頃は、居間で暖かい手料理を食べるなど、とうてい考えられないことだった。だが今ではそんな食事も、渚がいないという欠落感が先に立ってしまい、寂しい。
(渚の誕生日にはだんごのぬいぐるみをプレゼントしよう)
朋也は不意にそんなことを思った。
渚の誕生日はクリスマスだ。それまでに金を貯めよう。今でもだんご大家族のぬいぐるみを売っている店も探さなくてはならない。

いずれも先の話だった。
それまでに渚の体調が回復していることを願う。
カーテンを閉めようとして、ふと窓の外に視線を向ける。最後に残っていた明るさも消え、既に夜の帳が落ち始めていた。
子供の頃は、まだ明るいからと油断して帰宅するのが遅くなり、それで親父に怒られたものだ。過ぎ去ってしまった時代を思い出す。もう戻ることのない、遠い時代の話。
カーテンを閉め、明かりを消す。部屋の中の領域が曖昧になり、安らかな静けさが訪れる。
部屋から出て、音を立てないようにふすまを閉めると、朋也は食卓へと急いだ。